

厳しい冬の寒さも和らぎ、春の訪れが感じられる季節となりました。私たち六十四回生は、卒業を迎え、これから先の生活に期待を寄せるとともに、六年間過ごした駒場東邦を離れることを物寂しく感じています。

本日私たち卒業生だけでなく、お世話になった家族にもこうして私たちの卒業を見送っていただけの場を設けていただいたことに、卒業生を代表して感謝申し上げます。

私たち六十四回生の高校三年間はまさに「激動」の三年間でした。高校生活の始まりは、中学生の頃は思いもしなかった休校、オンライン授業でした。私たちの多くが楽しみにしていた部活動の合宿や体育祭といったイベントだけでなく、それまで当たり前だった学校での日常生活も失われました。やり場のない悔しさや苦しみを感じた人がほとんどだったと思います。そんな中で、私たちは、先輩方が残していった行事や日常の習慣などを、時には新しく考え直し、時には伝統を引き継ぎ、これまでにないものを作り上げてきました。

進化論で有名なダーウィンの言葉に「強い者、賢い者が生き残るのではない。変化できる者が生き残るのだ。」という言葉があります。駒東生は、世間から見ると優秀だとみなされる道に進んでいく人が多いかもしれませんが。しかし、そのような道に進んだとしても社会では必ずしも生き残れないことをダーウィンの言葉は示唆しているのだと思います。私たち六十四回生は、新型コロナウイルスによって社会生活が変化する中、体育祭、文化祭、修学旅行などさまざまな場面で変化に対応してきました。例えば、私が所属していた行政委員会では、新入生向けの部活紹介のイベントを、これまでの形式と新しい形式を混ぜ合わせて行うなど、多くの場面で様々な工夫をしてきました。このような高校三年間の体験は、これから社会で生きていく中で重要であり、私たち六十四回生にしかできない貴重な経験だったと思っています。そして、私たちのそのような貴重な経験は、私たちだけでは到底成し遂げることのできないものでした。先生方や、家族をはじめとして、同級生や先輩、後輩、他校の同年代の友人など、さまざまな人たちの協力があってこそ、私たちはこうしてさまざまな体験ができました。今まで関わってきたすべての方々に感謝申し上げます。

さて、世間でのコロナウイルスへの対応も徐々に変わりつつあり、これからも変化を余儀なくされるでしょう。私たち六十四回生やこれまでの先輩方が残してきた伝統や、コロナウイルスへの対応を生かし、よりよい新しい駒場東邦を後輩たちが築いていくことを期待しています。

私たち六十四回生は、駒場東邦で六年間をともに過ごした最高の仲間たちとともに、「世界の進歩にあずかるために」、「巖の意志を持って」、広い世界に旅立っていきます。

令和五年三月七日 卒業生代表 中野湧太